

随想

## 大河流転 ——友人への手紙——

岡田 久美子

ナイル川

アブシンベルにて

ラムゼスⅡ世は、なんと自己顕示欲の強いファラオだったのでしょうか。誰しも強い権力の座に着くと、そんなものかとも思いますが、それにしても自分の大きな像を、自分を祀る大きな神殿を、よくまあ飽きもせず造らせたものよ……と思います。

カイロからの飛行機が南下するにつれて、茶色だった水の色がだんだん青く変わってきました。砂漠の中を流れる、ただ一筋の、生命の水。この川には、スーダンのハルツームの青ナイル白ナイル合流部以降、殆ど支流は見られません。北アフリカの人口分布図を見ると、密が疎に漸移していくのではなく、水の得られるところから或る距離が隔たると、いきなり疎に転換してしまっています。このことは、上空からナイル川兩岸の土地利用の状態を俯瞰して、なるほどと納得できました。

日差しは同じように強いのですが、喧噪のカイロとは違って、静寂がナセル湖の水面を覆っています。棗椰子の向こうに、多くのヌビア人を移住させ、10年の歳月をかけて完成したアスワンハイダムが見えてきました。このダムを建設するについては、反対意見は全く出なかったとか。増加を続ける人口問題の重圧があったからと言われていますが、有無を言わせぬナセルの力や、旧ソ連からの援助の関係もきっと大きかったことでしょう。

ともあれ、農業用水がたっぷり使えて、発電量も飛躍的に増えてと、明るい希望に溢れていた筈なのに、やってみないと分からないものです。上流からの肥沃な土砂がナセル湖に沈殿してしまい、貯水能力は落ちるし、下流では昔の無肥料耕作は夢物語となりました。加えて灌漑地域に付き

ものの、塩分の集積にも悩まされています。また、広いナセル湖の水面から蒸発した水分が、予期せぬ驟雨となつての鉄砲水。まだあつて、河口ではナイルデルタの後退やら、ダム上流では水が澱んで風土病の増加等々。完成後30年間で、かなりの負の部分が見えてきてしまっています。勿論、プラス面も評価しなければいけません。

さて、待ちかねていたアブシンベル大神殿が、いよいよ眼下に見えてきました。あれ？小さい？そうか、写真で見慣れているのは、神殿を下から見上げる構図ばかり。上から見たら、小さく思えてしまうのも当然でしょうね。

水辺の近くの小さな飛行場では、紅い火焰樹の花がとても暑そう。焼けた砂地の道を辿って、先ずは大神殿の正面に廻ります。ウーム、やはり大きい！涼やかな切れ長の毗、唇の端のキリッとした線。見事なものです。長い年月、熱砂に埋もれていたというのに、石に刻んだ鋭い線はこんなにも美しいま、保存されていたのでしょうか。それにしても、これだけ大きなものを1000以上のブロックに切り分け、9年間かけて65m上部に移転したのですから、水没から救いたいというユネスコの意気込みは相当なものだったようです。

ヌビアの熱い砂、ナイルの青い水、そして巨大なファラオの石像。これはもうエジプトそのもの。

太陽が傾き、涼しい川風が吹いてきました。さあ、ナイルの水面へ。ファルーカ（三角帆の小舟）を操るのは、白髯瘦躯の船頭です。帆を上げ、櫓を押し、歌を唄って土産物も売り……という、八面六臂の大活躍。各国からのお客を相手にしているだけに、挨拶言葉の語彙は、どうしてなかなか豊富な様子。棧橋に着いて櫓を収めたとき、この古武士的風貌の老翁は、静かな日本語でひと言。「さらばじゃ」。

## アマゾン川

### マナウスにて

先便は、世界最長のナイル川でしたから、今度は流域面積の最大を。

とにかく、アマゾン川の集水面積は凄い。何しろ2位のザイル川の2倍余もあるのですから。機上から見た此の川は、緑濃い樹林が続く中にあっちこっち、というのは大きく蛇行しているからですが、白く光る夥しい水が拡がっている……そんな印象でした。

九州に匹敵する大きさの島を、河口に持つアマゾン。その河口から1500km、庶民の足のガイオーラ(川蒸気)で遡行に5日を要するのが、中流の此処マナウスです。マナウス港は、河港のようには見えません。外洋航行の大型船舶が何隻も停泊していることでも頷けるように、海の港そのものです。19C末には、既にリバプールやルアーブルとの間に、定期商船が運航していたと聞きます。但し、河岸に並ぶ家々は、水位の変化に対応するために、全て杭上家屋。ガソリンスタンドは大きな筏の上に載っています。

それにしてもこの川の水量の豊かさ。世界中の河川の合計流量の20%を占めるというのですから、群を抜いています。ナイルとは対照的に、長大な支流を何本も持ち、その流域の降水量が年平均2300mmに及ぶのであれば、これはもう当然と言えますけれども。しかし、その強力な水源であり、地球規模の大気浄化装置でもある熱帯雨林が、周知のように破壊されつゝあります。地図を眺めても、トランスアマゾニアを始めとする長大な道路が樹林地帯を貫き、新しく開発された鉱山、牧場や畑があちこちに散在しています。富をもたらす筈であったそれらのものが、当初の思惑通りには機能せず、森林の荒廃を招く結果だけに終わってしまった例は少なくありません。だからといって座しているだけでは、経済は逼迫の度を加えるのも眼に見えています。ブラジルの苦悩は、さぞ測り知れぬものがあるのでしょう。

アマゾン川と称するのは、正確にはマナウスよりも下流の部分になります。マナウスまではソリモンエス川と呼ばれている本流に、此処で北から

のネグロ川が合しますが、この支流は腐植土をたっぷりと含んでいて、名前通り黒い川です。水温や比重など、茶褐色の本流とはかなり水質が異なるので、アマゾン川となってからも暫くの間、双方の水は混じり合わずに二色の水が並行して流れて行きます。

マナウスは1880年代から約30年間、天然ゴム景気に沸いていました。その時代の象徴となっていたのが、絢爛豪華なアマゾナス劇場です。パリのオペラ座のレプリカとして、19C末に完成しました。イタリアから大理石を取り寄せ、中国の絹織物を惜しげもなく使い、壁画はフランス人画家に描かせ、こけら落としにはカーソーを呼び……と、その成金振りは大変なものであったようです。但しその栄華も、イギリスがマレー半島でゴムのプランテーションに成功してからは、凋落の一途を辿る運命となります。

しかしマナウスは不死鳥でした。1968年には自由貿易港として蘇ったのです。さびれていたアマゾナス劇場もやがて復元修理され、今は観光名所の代表格として、脚光を浴びています。

もうひとつ、面白いと思ったのは軍の動物園。レンジャー部隊がジャングルで訓練の際、捕獲してきた動物を集めたものです。アルマジロ、バク、電気ウナギなどの珍しいものばかり。「餌代に」と寄付を募る箱が置いてありました。果たして動物の為か、それとも兵隊の飲み代に廻るのか、それは定かではありませんけれども。

夜、ボートでアマゾン川へ鰐狩りに出掛けました。細い水路に入ると、もう周囲は真の闇。星の輝きと、岸辺の水草に群れる蛍の淡い光だけが頼りです。船頭が素手で30cmほどの仔鰐を2匹、水草の中から捕まえました。「鰐狩り」ってこんなものなのかと思い始めた頃、ガイドや船頭の間に緊張感が走り、グランデという言葉が飛び交います。輪にした縄に、大きな鰐が掛かった様子。水中の木や根を山刀で切り払うなど、大変な苦勞の末、舷側に付けて連れ帰ったその鰐は、口と前足を括られて、クルーズ船の甲板へ。鰐の破壊力は、尖った鼻先と太い尾のひと振りにあるので、攻撃態勢は、前足を踏ん張って体を反らせた時に生じます。それを封じられた鰐、口も開けられなくなった鰐は、丸太棒と同じとか。でもやっぱり、傍に寄ったら怖かった！

## イラワジ川

パガンにて

マンダレーからの2泊3日のリバークルーズを終え、先刻パガンに着きました。ミャンマーのほぼ中央部に位置する古都パガンは、どちらを向いても大小のパゴダが目に入ります。なるほど此処はアンコールワットやポロプドゥールと並んで、仏教の三大遺跡の地なのだと、実感しました。

さて、ヒマラヤ山脈東端付近に発して、アンダマン海に注ぐこのイラワジ川。東南アジアの川としては、メコンやガンジスには及びませんが、全長約2000km、堂々たる長流です。ほぼ中程に位置するマンダレーでは、東からの大きな支流が合して、溢れんばかりの豊かな水量となります。傾斜はさほどとも思えないのに、流れは以外に速い。しかし波頭が立つほどではなく、総じて穏やかな流れです。この国の人々の、いつも穏やかな表情と同じように。

今回のクルーズ船は、2001年秋に就航したクラシックスタイルの新造船で、客室数26という小じんまりしたもの。ドイツの家族連れやアメリカの老夫妻グループなどとも、すぐ顔なじみになりました。イラワジクルーズは、結構リピーターも多いのだとか。運営はイギリスの会社が行い、総括責任者は大柄で威勢のいいイギリス人女性。あとの十数名のスタッフは、全員現地男性です。金ピカの肩章付き制服姿の船長以外は、民族衣装のロンジー姿。これは筒状になった、いわばロングの巻スカート。男性用と女性用では色や柄がはっきり区別され、着用法も少し違いますが、試してみると見た目よりもずっと足捌きがよく、涼しいのです。その土地ならではの受け継がれてきた生活の知恵を、こゝでもまたひとつ知りました。船室はチーク材と籐の組み合わせ。アッパーのオープンデッキでは、昼は川風に吹かれながら快くまどろみ、夜は満天の星に宇宙のロマンを語るなど、非日常的体験が楽しめます。

吃水が深いので、ローデッキの手摺りに寄ると、水面はすぐそこ。その視点から見るイラワジ川の風景は、また中々迫力のあるものです。川幅はかなりの広さなのですが、緩やかに蛇行を繰り返しているのです。攻撃斜面と滑走斜面の様子が、手に

取るように分かります。削り取る方は、いかにもイラワジ川らしい豪快な侵蝕ぶり。削られて後退を重ねた崖の上で、細い樹木が頼りなげに風に揺れていました。一方堆積の進んだ部分では、既に畑として耕されて、作物の世話に余念のない人々の姿が見られます。この畑は、イラワジ川がはるばる運んでくれた肥えた土や、こまかく軟らかい砂のおかげで、さぞおいしい野菜が収穫されていることでしょう。河口では、イラワジデルタが、年に50cmずつ南へ土地を拡大しているそうですから、これもまた羨ましい話です。

たっぷりの水が、常時確保されている安心感。ヤンゴン周辺、マンダレー周辺の二大穀倉地帯は言うに及ばず、ミャンマーでは何処へ行っても米作りが盛んです。あとは豆類が多い様子。重要な輸出品であるチーク材もまた、豊富な水が頼りです。

水汲み、水浴び、洗濯、そして魚釣り。川岸のどこでも見られる風景。生活に密着した川。逆に言えば、ミャンマーでは川の無い生活は考えられないようです。人々の一日は、薄く霧のかかった川岸から始まります。整備された船着場は無くても、小舟がその辺になんとなく集まって来て、籠に入った野菜や果物、穀物、香辛料、薪炭、それに鶏や豚、或いは壺などの容器、とにかく種々雑多なものが積み込まれたり、降ろされたり。籠の間をこども達が走り廻り、犬が吠え立て……。そして適当な時間が過ぎた頃、小舟は一艘もいなくなってしまいました。何処へ散ったのか。どんな流通ネットが張り巡らされているのか。実際に調べる事ができたら面白いでしょうね。

ヤンゴンなどの大都市はともかく、農村の暮らしは、現代大量消費生活とは無縁のようでした。とてもつましい暮らし。貧しくはあるけれど卑しくない暮らし。夜明けに炊いたご飯は、まず仏壇へ、次いで托鉢の僧へと供されます。家族揃っての朝食はそのあと。篤い信仰の心に支えられているからでしょうか。

「ビルマの豎琴」の澄んだ調べと、まだあどけない少年僧の真摯な合掌姿。それはイラワジの涼やかな川風と共に、私にとってのミャンマーの、清らかな印象です。

## 黄河

洛陽にて

一連の手紙には、あなたが既によくご承知のことを縷々書き並べてしまったことかと思えます。そればかりか、あなたから得た知識も、気付かずに嵌め込んでいて、多分、おやおやと苦笑しながら読んで下さったのではないのでしょうか。

では最後に、あなたの大好きな中国へ。国境も含めて、中国の大河と言えば、きっと誰もが紅龍（長江）、黄龍（黄河）、黒龍（黒龍江）を思い浮かべるでしょうね。長さは、紅龍。流域面積となると、黒龍。しかし、こと古代文明から見れば、これはもう、何といても黄河の出番です。「河」は一字で黄河を表現するのですから。そしてまた記録によると、2000年間に1500回にも及ぶ決壊と、20回の流路変更をしている河でもあります。年間約16億トンの泥土の流出による大規模な天井川。下流付近の断流。黄河の治水は、いつの時代でも中国にとっての大問題でした。

黄河は、当然のことながらその5500kmほどの流路の途中で、いろいろな顔を見せてくれます。

- (1) 上流部 青蔵高原からオルドス付近  
黒き点動きおるなりヤクの群  
青海湖辺風漂々
- (2) 中流部 黄土高原  
崖に沿う大いなる居宅ヤオトンの  
朱塗りの門扉白き羊群
- (3) 下流部 華北平原  
渺茫とビニルの波うねり行く  
ハウスの中に葱溢れたり
- (4) 河口部 黄河三角洲  
孤東なる渤海防堤寄する波

黄河の色なり沖は青きに  
(1) の最上流部と (4) は、私は訪ねたことがありません。「逆でしょう？」と笑われてしまいそうですが、窮余の一策、あなたからの手紙の一部を引用させて頂きました。楷書体の部分です。

(1) では、クンルン山脈を遠望し、遙か西方タクラマカン砂漠からの風の音とその匂いに、「河源」を実感されたことでしょう。

(2) では、風積土の黄土をせっせと削って沖積土にしている河。三門峡ダムも埋まりつゝありま

す。彎曲部の内モンゴルでは五畜の遊牧も。

(3) では、見渡す限りの畑作地。小麦や豆類の他に各種の野菜類が多く、特に高速道路沿いでは青いビニルのハウスがどこまでも続きます。それが風に揺れ、陽に輝き、まるで海面のよう。

(4) では、猛烈な黄砂舞う風。河口方面へ向けてシャッターを押すのがやっと。そんな中で、勝利油田のポンプは稼働しているのですね。

あなたは今、中国の何処にいらっしゃるのでしょうか。ある時は風を切る隼となり、ある時は野を駆ける駿馬となり、またある時には滝を遡る大鯉となって、興の赴くまゝ、縦横に好きな所へ出没しておいでなのでしょう。今日はきっと、造詣の深い漢詩にゆかりの土地に、遊ばれたのでは？それでは明日は、壮大且つ無謀な、といわれてる「南水北調プロジェクト」の辺りを見て来て下さいませんか。長江の水で、涸れた黄河の水を補おうという、複数の運河の建設を。

昨年の初夏、あなたは黄河に沿って30日間、走行距離5000kmを越えるバスの旅をされましたね。旅立ちの朝、ボンボヤージュの代わりにと、腰折れを、遊び心でファックスしてみました。

囊中のカメラの重み確かなり

黄龍のうねりいざや捉えむ  
すると、出立前だというのに返歌が届きました。

いざやいざや河源への旅いつよりか

あくがれいしをいよよその日ぞ  
張り切って、元気いっぱいだったあなた。しかしさすがに旅の途中、雨の洛陽では半日をゆっくり休養に充てられたとか。

そう、広い中国の旅に疲れたら、古都洛陽でのひと休みがハオ(好)ですね。殊に陽春の今、洛陽では多彩な牡丹が妍を競って咲き誇り、それはそれは見事です。淡紅色の「酔楊妃」、白い「梨花雪」、紫を含む「洛陽紅」。あのチャーミングな微笑、開き初める牡丹に似た微笑を浮かべて、あなたは今、其処で快い流れに身をゆだねておいでですね。

大河流転。昨年末急逝された、畏友石田裕子さん。黄河の一滴は、またあなたの黄河へ戻ります。

おかだ・くみこ 3 回生